

## 東京電力福島第一原子力発電所・事故の収束に向けた道筋 進捗状況のポイント

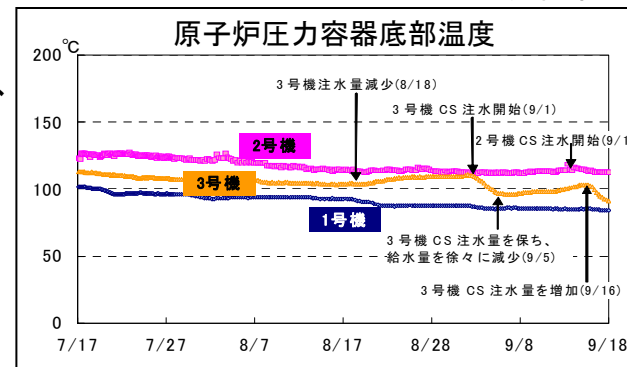
## 1. 基本的考え方(変更なし)

原子炉および使用済燃料プールの安定的冷却状態を確立し、放射性物質の放出を抑制することで、避難されている方々のご帰宅の実現および国民の皆さまが安心して生活いただけるよう全力で取り組む。

## 2. 目標・達成時期等

【ステップ2:放射性物質の放出が管理され、放射線量が大幅に抑えられている】

- 目標・達成時期に変更なし。なお、【課題(2)燃料プール】はステップ2の目標を達成済。
- 滞留水全体量は、豪雨や処理施設の長期停止にも耐えられるレベルまで減少。現在、循環注水冷却を継続・強化中。
- 圧力容器底部温度は1号機84℃、2号機113℃、3号機91℃(9/19時点)となり、1号機は100℃以下で安定。今後、2,3号機についても効果的な注水を行い、圧力容器底部温度等を監視しつつ放射性物質の放出を管理し、「冷温停止状態」への移行を目指す。
- その後、モニタリング結果から放射性物質の放出量を最終評価する。なお、最終評価までの間、放出量評価は継続して実施し、公表する。
- こうした取組により、原子炉等のより安定した冷却と放射性物質の放出を管理・抑制できていることを確認する。



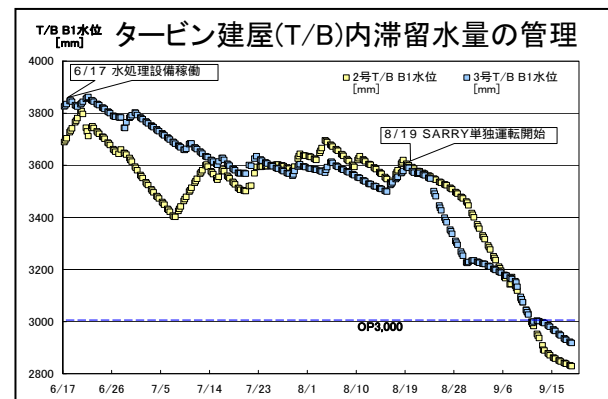
## 3. 至近1ヶ月の総括と今後の取組み(主な変更点)

## 【課題(1)原子炉】:注水ラインを変更し、より効果的な冷却を開始

- 2,3号機は給水ラインに加えコアスプレイ(CS)からの注水開始(2号機9/14、3号機9/1)。
- 注水量は、1号機が毎時約3.6m<sup>3</sup>、2号機\*が毎時約7.6m<sup>3</sup>、3号機\*が毎時約12m<sup>3</sup>。  
\*給水ラインとコアスプレイから注水中
- 1号機の原子炉圧力容器底部温度は100℃以下で安定。2,3号機も、冷温停止状態達成に十分な注水量を把握し、100℃以下での安定を目指す。

## 【課題(3)滞留水】:滞留水の水位は豪雨や処理施設の長期停止にも耐えうるレベルに到達

- 滞留水処理実績は、累計約95,420トン(9/18時点)、1週間の平均稼働率は83%(9/18時点)。滞留水の水位は当面の目標レベル(O.P.3,000)に到達(9/11)。
- 安定的な処理に向け、セシウム吸着処理施設(サリー)を設置。除染処理施設の増強完了(8/18)。
- 蒸発濃縮装置による塩分処理施設も増強中(10月中旬)。



## 【課題(4)地下水】:遮水壁の基本設計完了

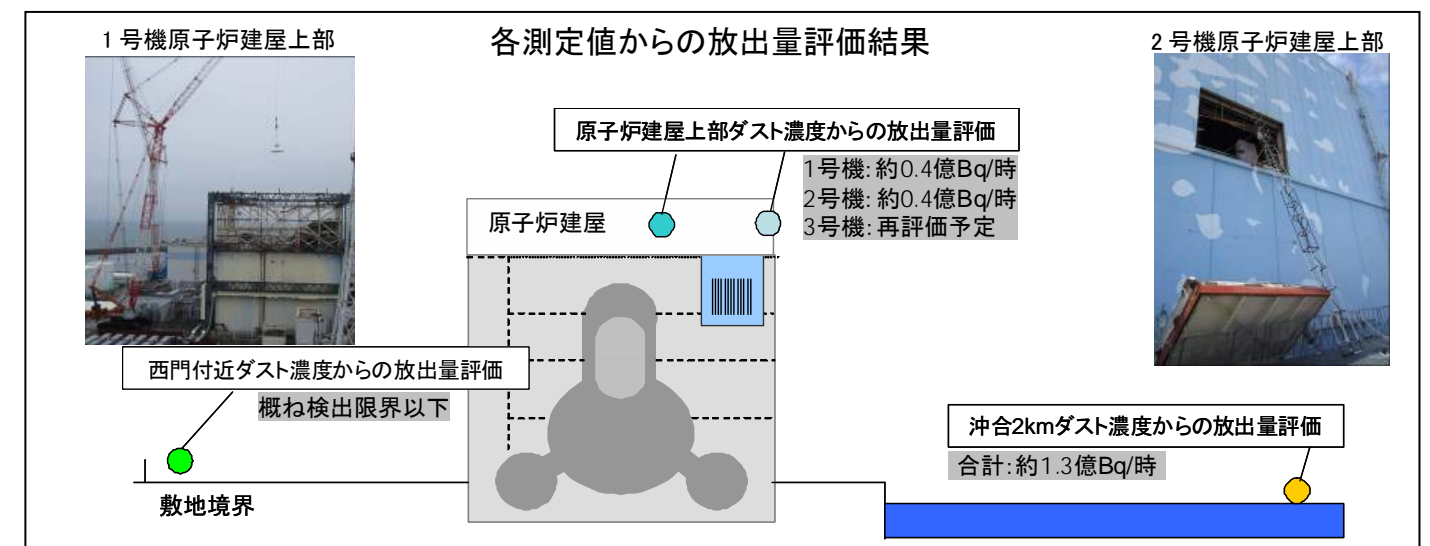
- 遮水壁の基本設計完了(8/31)。現在、工事着手に向けて、詳細検討を実施中。

## 【課題(5)大気・土壌】:3号機原子炉建屋上部瓦礫撤去開始

- 3号機原子炉建屋上部の瓦礫撤去を開始(9/10)、4号機も間もなく開始予定。
- 撤去した瓦礫等を保管エリア内で整理して管理。
- 格納容器ガス管理システムの製作開始(8/18)。

## 【課題(6)測定・低減・公表】:現時点における放射性物質の放出量を評価

- 1~3号機からの現時点の放出量を、原子炉建屋上部や陸域及び海域での空气中放射性物質濃度(ダスト濃度)を基に、総合的に評価。
- 今回の評価における現放出量の最大値は1~3号機合計で約2億ベクレル/時と推定(事故時に比べ約四百万分の一\*)。
- ※原子力安全委員会(8/22)における事故時の最大放出量の再評価値が減少したため前回より減少
- 敷地境界の年間被ばく線量を最大で約0.4ミリシーベルト/年(暫定値)と評価(これまでに既に放出された放射性物質の影響を除く)。



- 継続的に原子炉建屋上部や陸域及び海域での空气中放射性物質濃度測定を実施し、放出抑制対策に伴う放出量の低減傾向を把握する。今後、より精度の高い評価を実施予定。
- 「除染推進に向けた基本的考え方」及び「除染に関する緊急実施基本方針」等を決定(8/26)。8月下旬より、除染実証事業を伊達市、南相馬市において開始。

## 【課題(7)津波・補強・他】:全号機の原子炉建屋の耐震安全性評価を完了(8/26)。

## 【課題(8)生活・職場環境】:仮設寮は予定の1,600人分を建設完了(8/31)

## 【課題(9)放射線管理・医療】:作業員の健康管理を充実

- 夏場限定だった5/6号救急医療室を恒常施設化、看護師・放射線技師の派遣も開始。

## 【課題(10)要員育成・配置】:放射線関係の要員育成研修を継続実施